

(文化財保護シンボルマーク)

富山県大門町

二口油免遺跡第Ⅲ次A地区発掘調査概報

—二口土地区画整理事業に係る調査—

1999年3月
大門町教育委員会

巻頭図版



調査対象地遠景（西から）

序

豊かな自然に恵まれた大門町の丘陵地や射水平野には様々な遺跡が存在しています。

二口油免遺跡は射水平野の最西端に位置し、平成5年度に県営は場整備事業に伴う試掘調査で確認された遺跡です。

平成8年度には大門町二口土地区画整理事業に伴う試掘調査でさらに範囲が拡大されました。

事業範囲内約12,200m²の広大な面積において保存が不可能と判断されたため、翌9年度より記録保存を目的として本調査を実施しています。

本年度は2年目の調査ですが、弥生時代後期や奈良・平安時代の遺構・遺物が検出され、この地には非常に長い間に渡って人々が生活していたことを示してくれました。

この報告書は、その成果が地域の歴史の理解や文化財の保護意識の高揚に寄与できることを願つてまとめたものであります。

資料としてご活用頂けたら幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたり寛大なご理解と多大なご協力を頂きました大門町二口土地区画整理組合のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成11年3月

大門町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山県射水郡大門町に所在する二口油免遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山高岡広域都市計画事業 二口土地区画整理事業に伴う本調査である。調査は大門町二口土地区画整理組合と大門町との間に締結した委託契約に基づき、大門町教育委員会が実施した。
- 3 現地調査は1998年6月1日～12月18日までを行い、整理作業は現地調査開始より1999年3月25日まで行った。調査面積は4,700m²である。
- 4 調査は、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て大門町教育委員会が実施した。調査担当者は下記のとおりである。

大門町教育委員会　社会教育係　学芸員　尾野寺 克 実
同　　　　　　　　　　調査員　中井 英策

- 5 本書の執筆・編集は、尾野寺・中井が行った。
- 6 発掘調査作業・遺物整理作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
- 7 調査から本書の作成に至まで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表する。
安念幹倫・池野正男・伊藤隆三・上野草・宇野隆夫・久々忠義・黒坪一樹・高梨清志・田中明・塚田一成
辻谷真夕・眞鍋治・宮田進一・山口辰一（五十音順・敬称略）
- 8 遺物整理・報告書作成作業の参加者は次のとおりである。
高木公輔・高田紀美代・布日美佳・矢村有紀

本文目次

I	遺跡の立地	1
II	調査に至る経緯	2
III	調査の概要	2
1.	調査の方法	2
2.	調査	2
a	基本層序	2
b	第1・第2トレンチ	4
c	第3トレンチ	6
IV	まとめ	8

挿図目次

第1図	調査対象位置図	1
第2図	遺構配置図	3
第3図	SD610・SX585	4
第4図	方形区画2・3・4	5
第5図	10T～U1区遺構群	6
第6図	SD1001	7

図版目次

図版1	出土遺物実測図（弥生時代1）	9
図版2	出土遺物実測図（弥生時代2）	10
図版3	出土遺物実測図（弥生時代3）	11
図版4	出土遺物実測図（弥生時代4）	12
図版5	出土遺物実測図（奈良・平安時代）	13

写真図版目次

卷頭写真	調査地遠景（西から）	
写真図版1	遺構写真	14
写真図版2	作業風景写真	15
写真図版3	遺構写真	16
写真図版4	遺構写真	17
写真図版5	遺物出土状況写真	18
写真図版6	出土遺物写真（1）	19
写真図版7	出土遺物写真（2）	20
写真図版8	出土遺物写真（3）	21

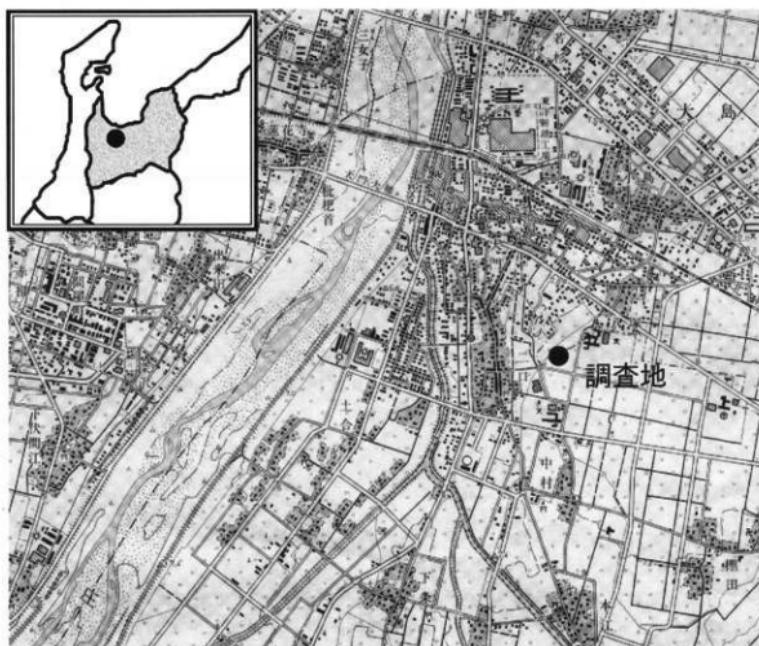
I. 遺跡の立地

二口油免遺跡は富山県の庄川下流の右岸に亘る標高7m前後の田園地帯に立地する。現在の行政区画では射水郡大島町との境界に接する。一帯については古くは三島野と呼ばれていた。湿地帯に微高地が点在する風景を表現したものと推察できよう。

転じて、近景では標高が北に向かって緩やかに下がる平らな地形である。これは昭和9年、庄川の大洪水の後に実施された耕地整理により、旧地形が改変されたものである。平成8年度の試掘調査では大門小学校西側及び、大門町立体育館西側の試掘トレーンチで、いわゆるビート層を確認しており、以前は低湿地であったことがよくわかる。標高は東に行くにつれ緩やかに上昇し、西には現在の九ヶ用水に流れ落ちる地形である。

二口油免遺跡では標高7m付近を境に遺構の検出状況に差異が生じる。これは旧地形の影響に因るところが大きいと思われる。

すなわち、近世に至るまで周辺の主な生活は標高7m以上と思われ、旧地形がそれよりも低ければ遺構の分布は希薄になり、それ以上であれば近年の耕作・土地改良により削平を受けやすい状態にあるといえる。このことからも遺構の分布による評価は慎重にすすめる必要性があると考えられる。



第1図 調査対象地位置図 (S=1/25,000)

II. 調査に至る経緯

大門町二口地内において土地区画整理事業が実施されることになり、平成7年度の分布調査結果を基に平成8年度には試掘調査を実施した。その結果、大門中学校西側から九ヶ用水までの試掘トレンチにて多数の遺構・遺物が確認された。

そこで、大門町二口土地区画整理組合と大門町教育委員会との間に協議を持ち、合計12,200m²を対象として本調査を実施することとなった。平成9年度は4,000m²について調査を行った。

平成10年度は事業の早期完了を目標に、事業者から残り8,200m²全ての調査を依頼されたが、日程上、大門教育委員会のみで調査を全うすることが不可能と判断されたため、一部について業者発注することとなった。

平成10年度発掘調査面積8,200m²の内、大門町教育委員会は、4,700m²を受け持つてA地区とし、残る3,500m²はB地区として大門町教育委員会の指導の元、(株)中部日本鉱業研究所が請負い、A・B両地区同時に調査を実施した。

III. 調査の概要

1. 調査の方法

調査区の現状は圃場であるため、トレンチ設定後重機により耕作上の除去を行った。トレンチは調査順に第1～第3トレンチまで設定した。

一部対象区には区画整理後、圃場に復旧するところもあることから、耕作土の取り扱いを考慮した。また、廃土を置くスペースに余裕がなかったため、第1トレンチ掘削中の廃土は第2トレンチに借り置きし、第2・第3トレンチ掘削中は調査後の第1トレンチに廃土を集めた。

地区の設定は平成9年度調査時に使用した国土地標をそのまま展開し、一辺10mのメッシュを設定した。X軸に数字をあて、X=80.330mを第5ラインとし、北に10m毎に6・7…と続く。

Y軸にはアルファベットを用い、Y=-9.800mをLとして、西から東にL・M…と続ける。また、地区名は東南角杭の名称を地区名とした。

遺構は検出後、遺構の種類に関わらず通し番号をつけて遺構番号とした。従って、調査の進展により他の遺構に吸収されて欠番になったものもある。また、平成9年度の調査トレンチが隣接することから平成9年度の遺構番号から連番にし、2次3次にまたがって検出した遺構は2次調査の遺構番号を優先して使用した。

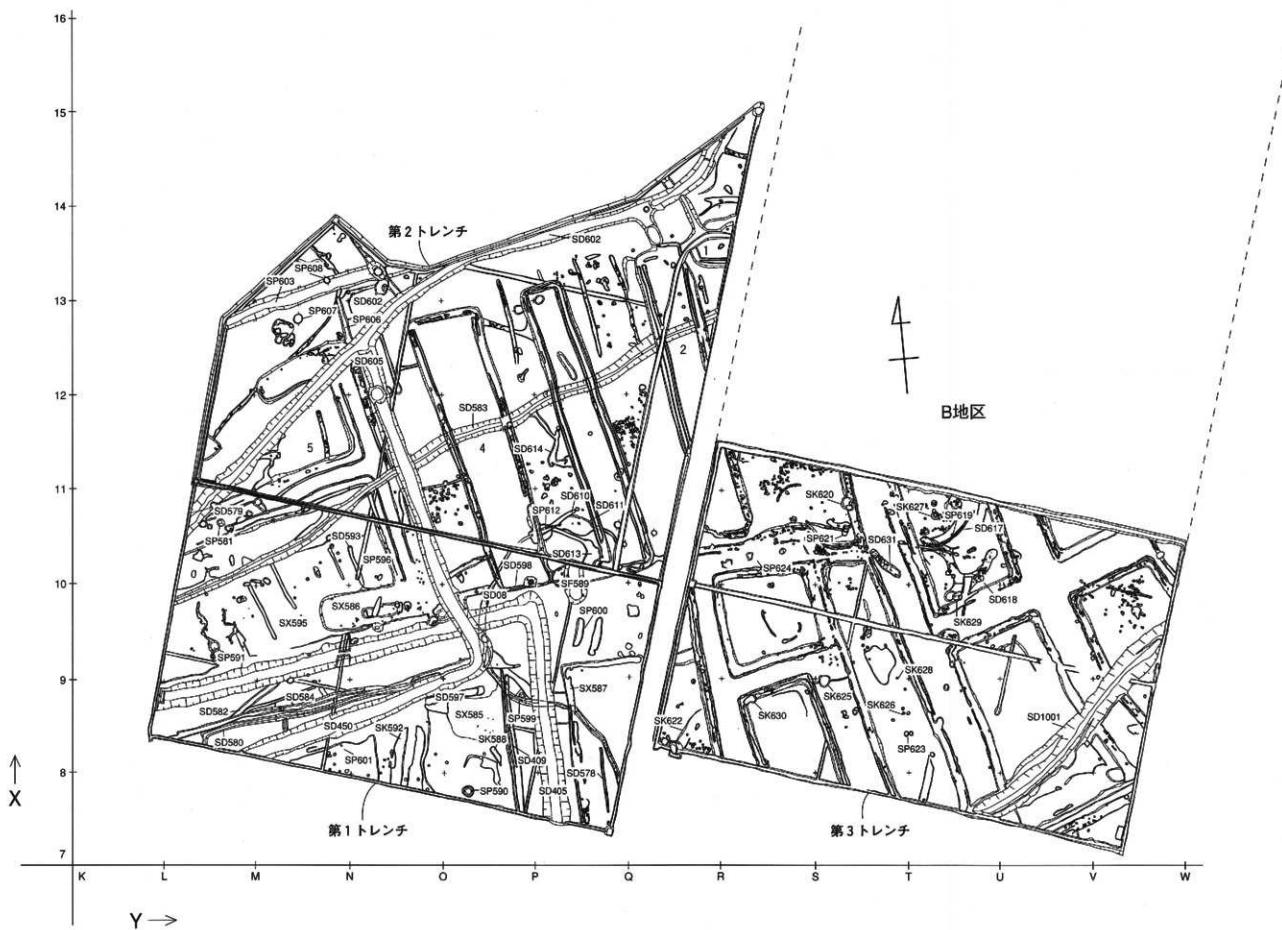
掘り下げは土層の観察を行いながら慎重に行い、必要に応じて土層図を作成した。記録は写真撮影を適時行い、実測図はラジコンヘリにより200分の1スケールの写真撮影から50分の1スケールの図面を作成した。

2. 調査

a 基本層序

上から1層・耕土、2層・床土（旧耕土）、3層・（暗）茶褐色粘質土、4層・黒褐色粘質土、5層・暗青灰色シルト質粘土（地山）である。

この内、遺構は5層で検出でき、弥生時代・奈良・平安時代のものが一面で見られた。3・4層はほとんど遺存せず、そのために床土直下で遺構を検出できた箇所がほとんどである。また、地山は北側に移動するにつれシルト系から砂質系に変化する傾向を示す。地山の一部では埴砂の基部のような砂層が縞状に走る場所が認められた。



第2図 遺構配置図 (S=1/400)

b 第1・第2トレンチ

平成9年度第2トレンチの北側に続く地区である。

地形的には東から西に向けて序々に下がる。遺構の検出はトレンチ東側で顕著である。

以下に主な遺構を紹介する。

弥生時代

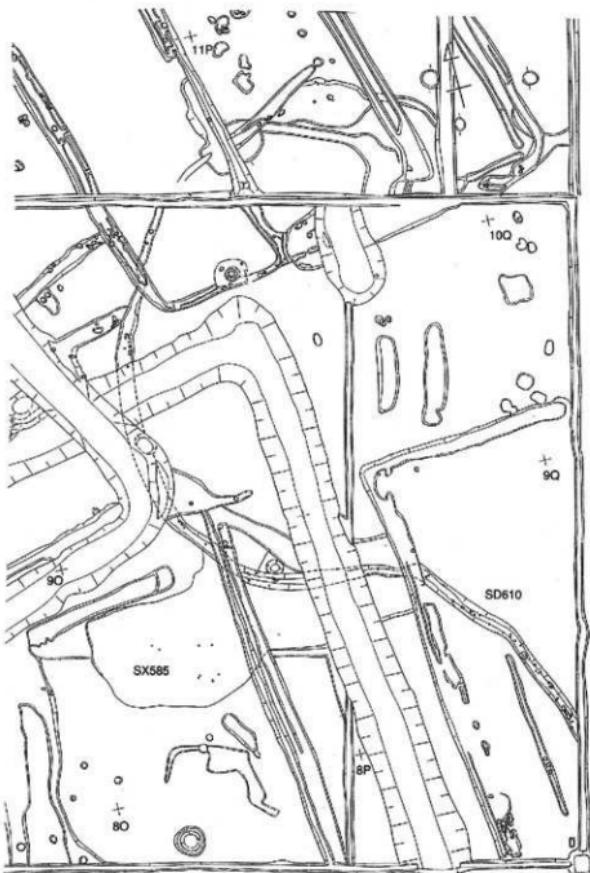
SD610

2次調査の第1トレンチでSD08として検出しているものと同一遺構である。幅約50cmを測り、S字状に大きく蛇行しながら第2ト

レンチ東南角で浅くなりつつ消滅する。消滅した付近には弥生期の遺構が重なり合っている。この溝はSD1001に合流し、排水路の役目を果たしていたと思われる。埋土には黒褐色土が入る。

SX585

平面は南に円弧を描く直径約7mの半円形である。深さは最大15cmで、くぼむ皿状の凹地である。埋土には黒褐色土が入り、弥生土器細片を多く包含していた。形状から住居の残欠が考えられるが、柱穴・側溝等が検出できなかつたので可能性の指摘に止める。



第3図 SD610・SX585 (S=1/200)

中世～近世

SD450 (SD605)・SD602・SD603

これらの溝状造構は検出した造構の中でも特に新しいものの一つである。

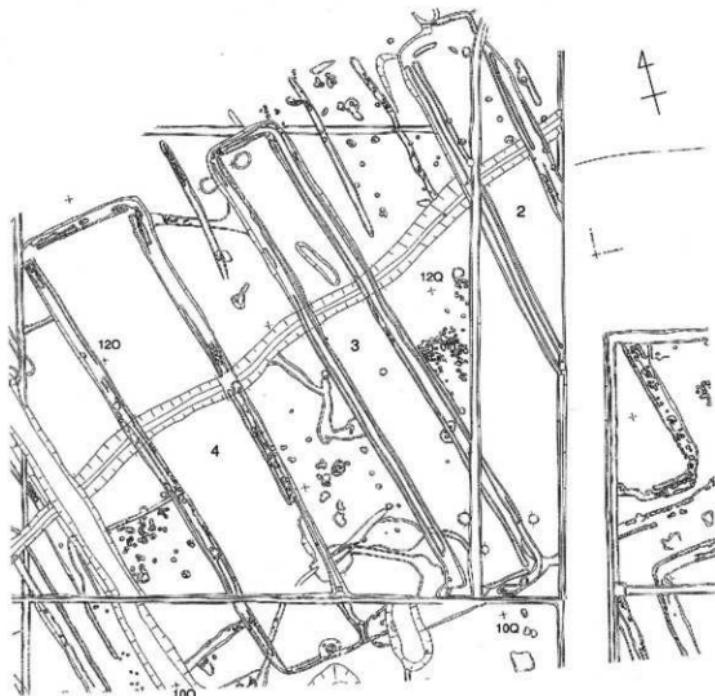
S D450 (S D605) は幅約 2 m を測り、暗褐色粘質土が堆積する。検出の状況から第 1 トレンチで確認した S D450 と第 2 トレンチで確認した S D605 は同一のものと判断できた。第 1 トレンチ南辺から東西に約 25m は 15° 方位をずらしてのび、直角に北側へ向きを変える。第 2 トレンチで方形区画 5 の東辺に重なりながら北端を S D602 に合流する。

S D602 は調査区の北辺に沿って検出した。現在の大島町との町境をトレースするようにはしる。方形区画 5 を切って、方形区画 2 と合流する。排水路を兼ねた地境溝の可能性が高い。

S D603 については、S D602 に付随する施設と思われる。

方形区画 1・2・3・4・5

方形区画は 2 次調査時に中世造構の上にさらに方形の暗褐色砂質土の堆積を検出していたものである。2 次調査では一部のみの検出であったが、今次調査では全体を確認することができた。



第 4 図 方形区画 2・3・4・5 (S=1/300)

遺構は区画2・3・4が南北約32m・東西約6~7mの長方形で辺に沿って内側の四周に溝を巡らす。内部は検出面よりやや低く削られており、検出時は平板な暗茶褐色の方形に見えるが、完掘すると長方形に巡る溝に見える。SD602との切りあい関係から区画1・5と2・3・4は時期差があり、区画1・5が先行する。平面形も1・5は不定形である。各区画は溝によって連結されている。また、区画内部にも溝がわずかに残る箇所もある。この区画は水はけをよくするために周の溝を深くし、内部は畝を形成するような耕作を行っているものと考えられることから、畠の可能性が強い。区画と区画の間が離れるのは同種を密集させないという病害に対する配慮から、根の浅い他種の作物をこの間で栽培していたと思われる。

弥生~古代

SD583

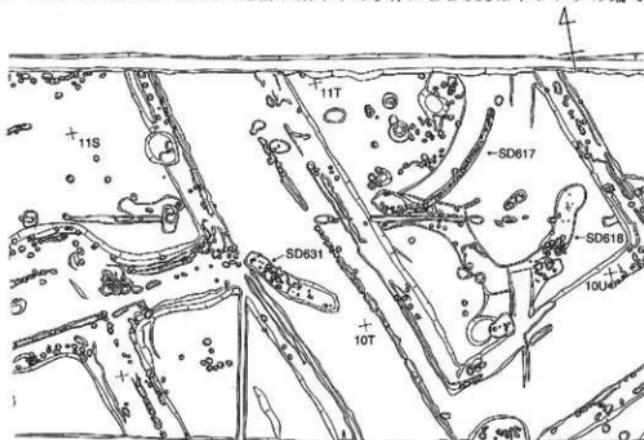
第1~2トレンチを北東方向に一直線にのびて、B地区に入つてからは北へ流れを変える溝である。幅約1.8m、深さ約70cmを測り、検出した長さは約65mである。断面形状は上部がすり鉢形で底面はやや方形になるため、矢板状のものが使用されていた可能性がある。覆土は大きく2種に分かれ、方形を呈する底面近くは黒褐色土で、すり鉢状を呈する上部は茶褐色土が入る。底部の黒褐色土からは弥生土器が、上部の茶褐色土からは須恵器が出土している。SD1001と同じく、弥生期の溝が奈良・平安時代に再利用されたものであると考えられる。

c 第3トレンチ

トレンチ東部を流れるSD1001の上面を茶褐色粘質土が覆い、その周辺にも広がる。ここでも区画遺構が5基確認できた。また北部中央では弥生期の土坑が検出でき、一括資料を得ることができた。

10T~U区遺構群（弥生時代）

10T・10U区にまたがり、浅い遺構が集中する。特にSD618はトレンチの端でもあり、



第5図 10T~U区遺構群 (S=1/200)

一部しか図上に表れていないが、その北側のB地区で残りの部分が検出されており、直径25m前後の楕円形を呈する区画遺構であることが分かっている。この遺構の内部に柱穴と考えられる浅い穴が多く見られ、平地式住居の残穴と考えられるものも含まれる。周堤基部がわずかながら検出でき、その幅は約3~3.5mを測る。

SD617

推定周堤帯内側に位置し、弧を描く。B地区でこの遺構の延長と思われる溝が検出されており、直径25mの区画を為すと考えられる。幅約30cm、深さは約15cmを測る。

SD618・SD631

2条の溝として検出したが、実際はB地区で確認した区画溝の一部で、削平のため深い部分だけが残ったものと考えられる。B地区では、半円形を描いて検出し、本調査区境につながる。長径25m、短径7mを測る。A地区では中央に向けた分岐が見られる。幅約1m、深度は20cm前後を測る。遺物は弥生時代後期のものが多く出土している。

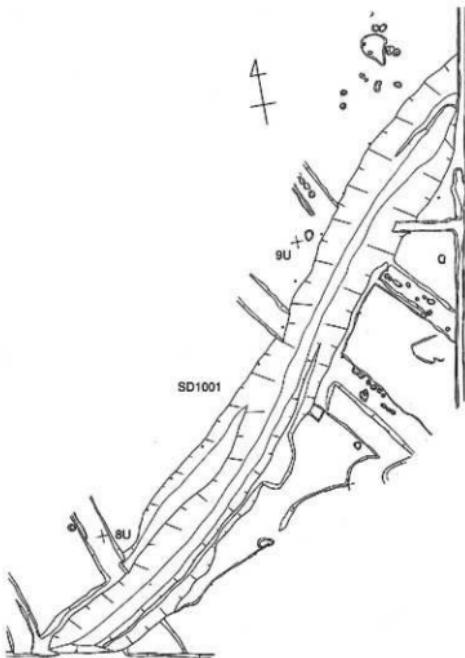
弥生～古代

SD1001

第2次調査では、第1トレンチ南西角から第3トレンチ北側壁まで約50mにわたり緩やかに逆S字を描いている。今次調査では第3トレンチ南壁東側から、東壁中央部に向かって一直線に延びる、約20mを検出した。断面は深いV字型であるが、肩部がやや崩れ広がっている。幅約2~2.5m、深さ約1.5mを測る。

土層は弥生時代の層と古代以降の層に大別できる。弥生時代の掘削が埋まりかけた後、奈良時代にその上をなぞって新たに掘り込まれている。弥生時代の層も出土遺物からさらに大きく2期に分けられ、かなりの長期間使用されたものと考えられる。

遺物の出土量は前回調査を大幅に下回るが、前回と同じく下層に弥生土器、上層には、須恵器・土師質土器がまとまって出土した。



第6図 SD1001 (S=1/200)

IV.まとめ

- ・弥生時代から古墳時代にかけては、集落としての密度・拡がり・景観の時期的変遷をより明らかにする。
- ・古代～中・近世について2次調査で検出された掘立柱建物群の規模・時期を絞り込む。
以上のことから3次調査の課題であった。結果としては近世のものと考えられる耕作が地山に達していたため、造構の遺存状況が悪く、造構の拡がりを確認するに止まった。
- しかし、弥生時代の成果としては、集落の境界と思われたS D1001の北西に平行するS D583が検出でき、住居の痕跡と考えられる造構も数基、確認できた。

S D583以西にはほとんど造構が見られず、ここで集落の境界になる可能性が強い。

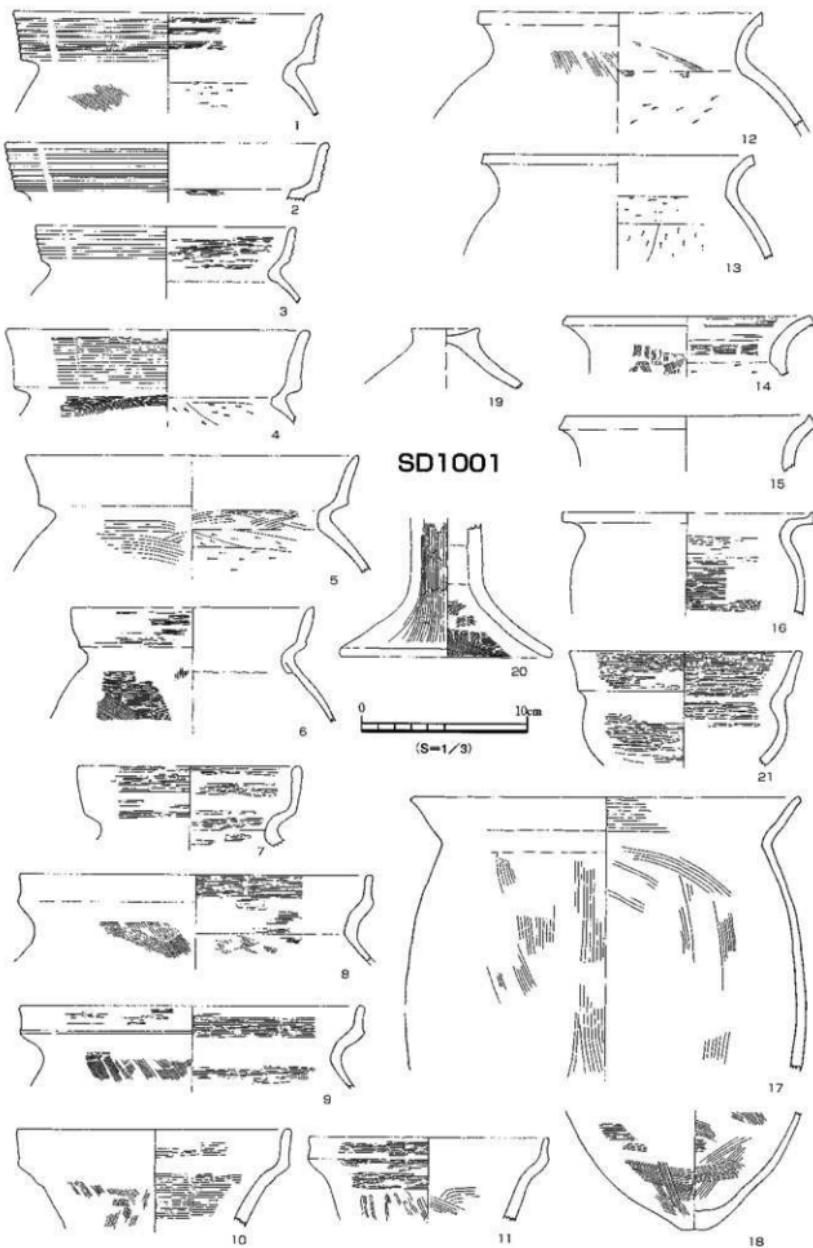
S D1001とS D583を環濠として捉えるか否かは、資料不足のため踏み込んで考えることは避けられるが、この集落における両構の意味合いが重要なものと考えられ、非常に興味深い。

本調査区の奈良・平安時代については、S D1001以北は造構の分布が散在しており、集落の拡がりの終りを感じさせる。しかし、B地区北部では掘立柱建物が2棟検出され、また、S D583の延長がその建物造構周辺まで延びると、他の数条の溝と共に多量の古代遺物を含むことになる。2次調査では6棟の掘立柱建物が検出されており、2次調査区の南東に集落の中心の存在が考えられ、今回検出したものは、その北端部になると考えられる。

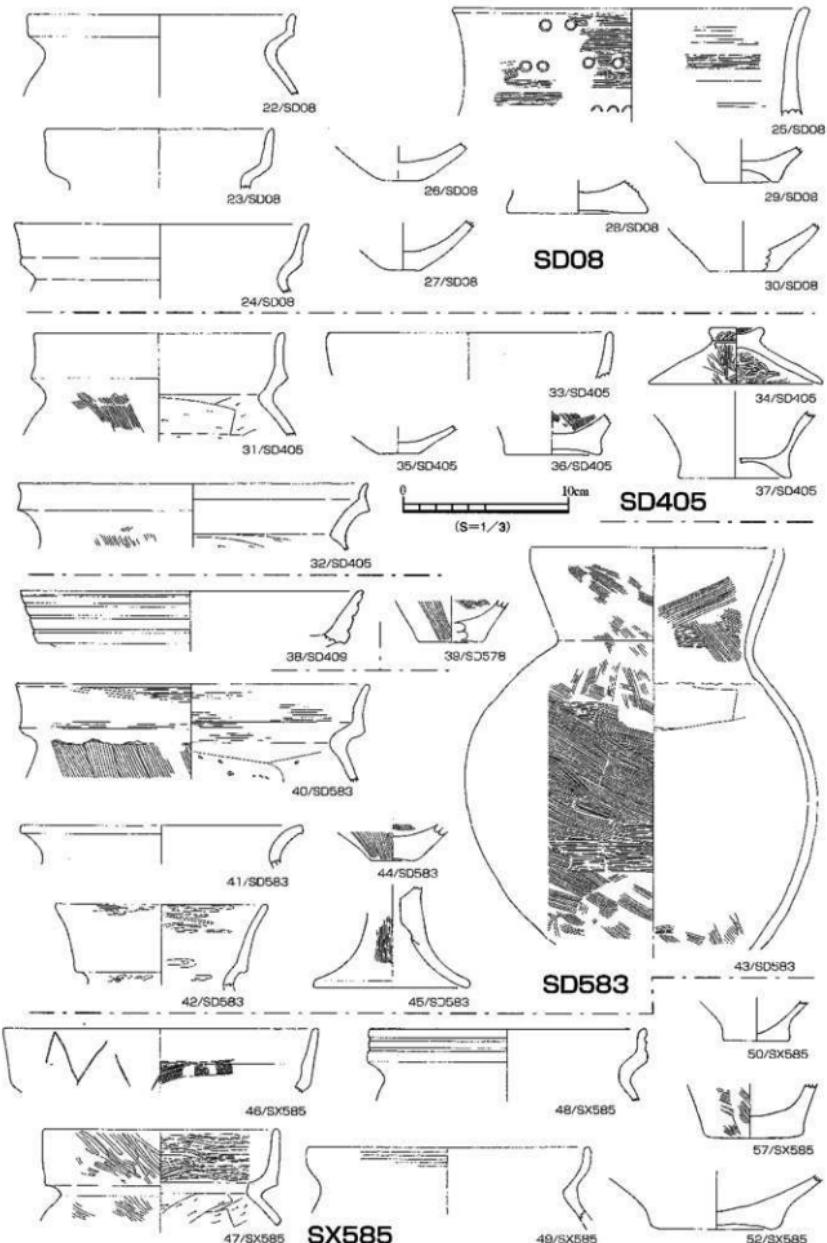
近年、氷見市で新たに全長107mの「大前方後方墳」の柳田布尾山古墳が確認された。また、婦中の県指定史跡「使塚古墳」は3世紀末の築造であると報告されている。弥生時代から古墳時代の社会変革が見直されている中で、この地における弥生時代終末の軍事的性格を帯びた集落の有無は、上記の古墳を支えた社会の成立を解明する上で特に要になると思われる。

参考文献

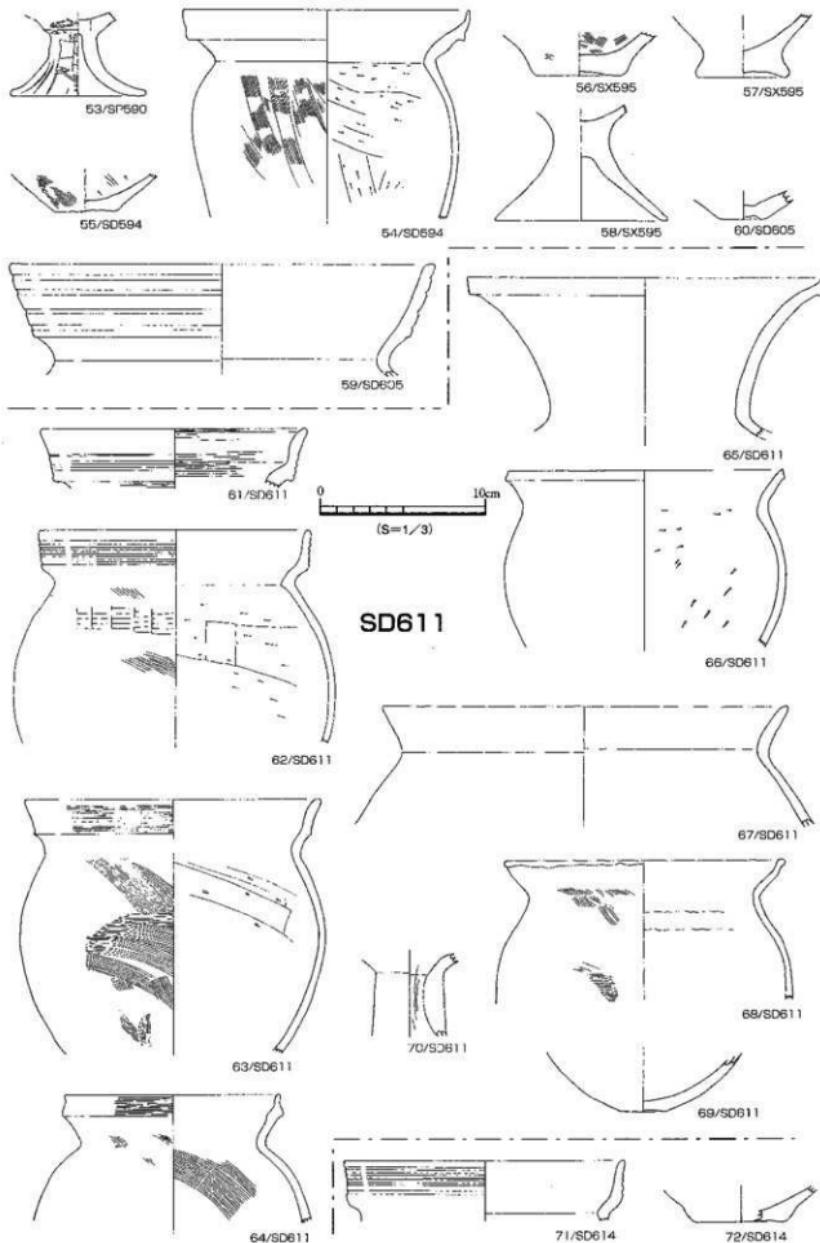
- （株）中部日本歴史研究所・大門町教育委員会 1999 「二口油免遺跡B地区発掘調査報告」
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」 「漆町遺跡I」 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 他 1987 「永町ガマノマガリ遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- 富山県文化振興財團 1998 「勅使塚古墳発掘調査現地説明会資料」
- 柄木英道 1984 「器台形土器の形態の変遷について」 「北陸の考古学」 第5編 石川考古学研究会
- 谷内尾晋司 1984 「北加賀における古墳出現期の土器について」 「北陸の考古学」 第5編 石川考古学研究会



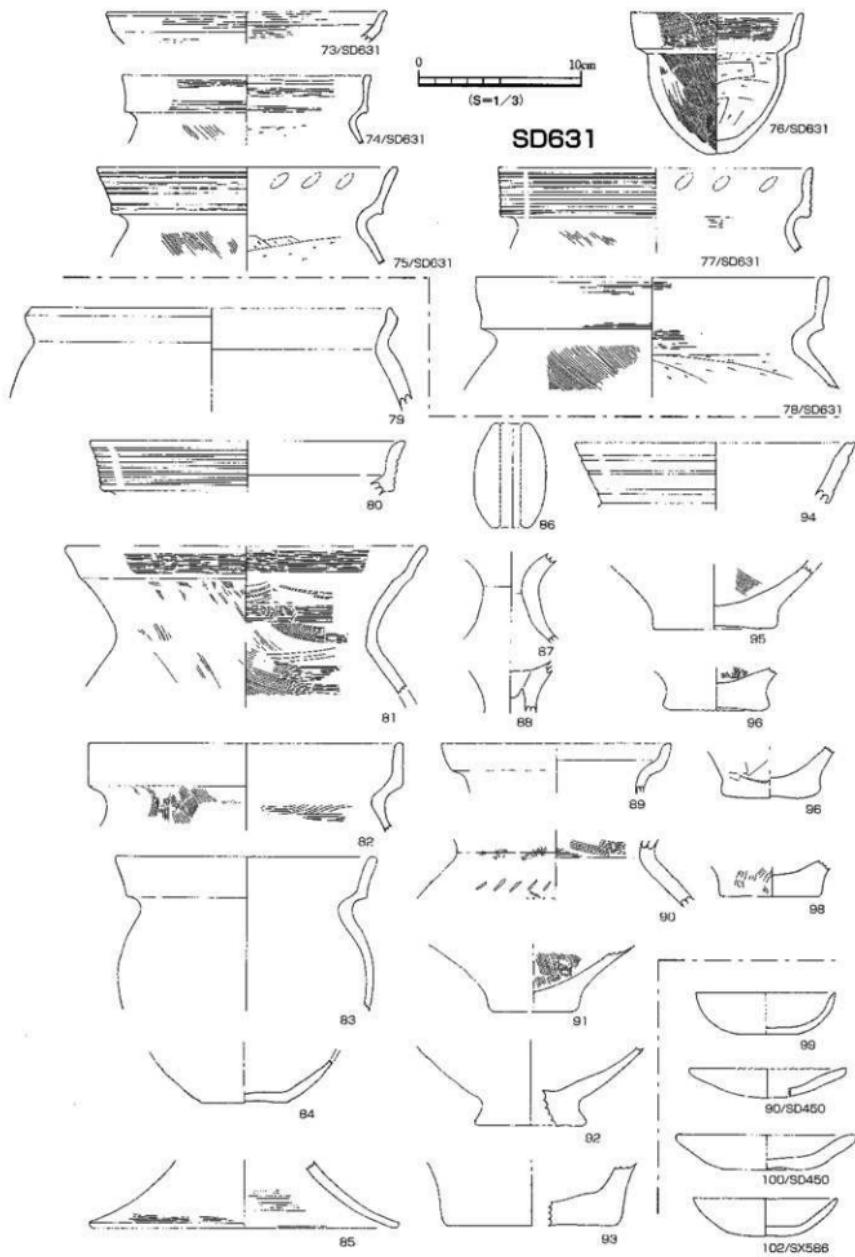
図版1 出土遺物実測図（弥生時代1）



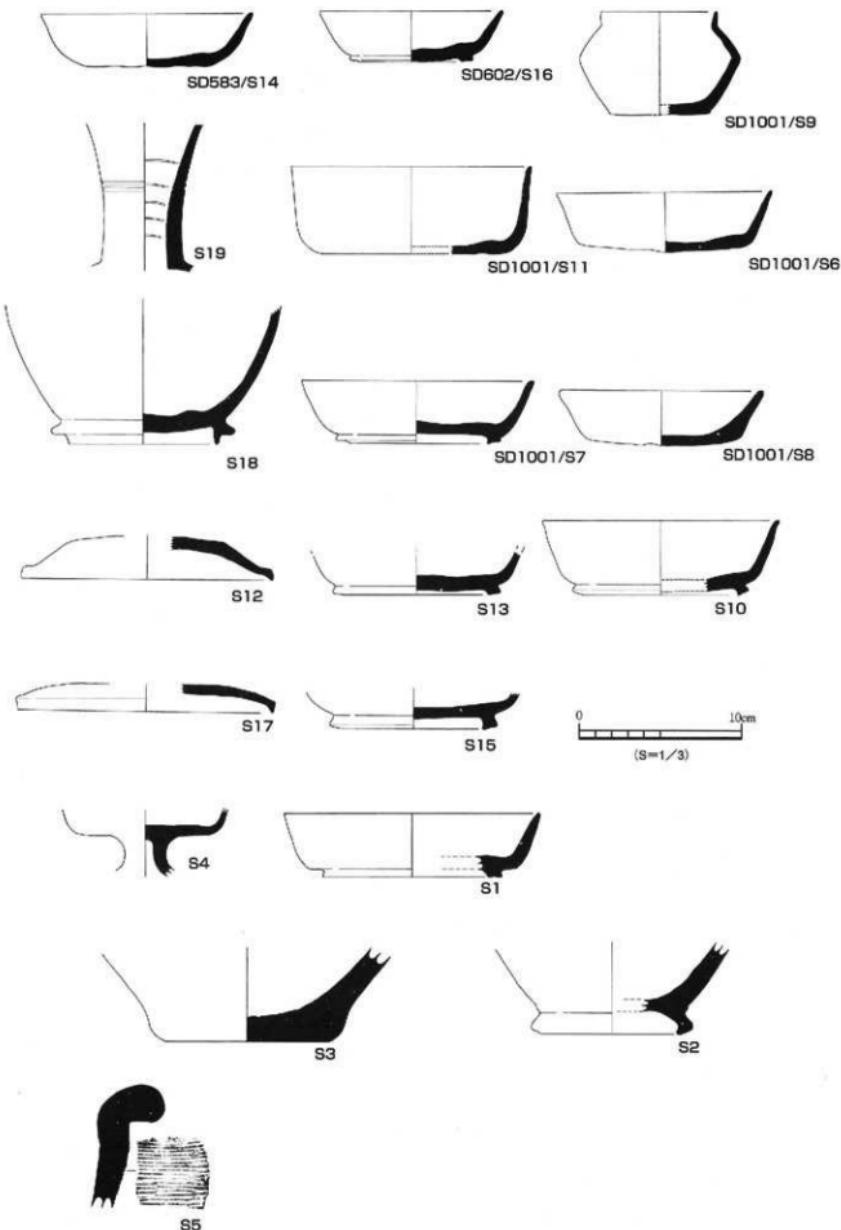
図版2 出土遺物実測図（弥生時代2）



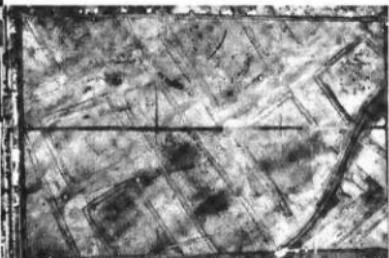
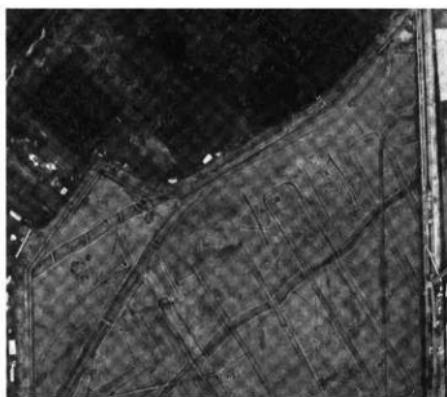
図版3 出土遺物実測図（弥生時代3）



図版4 出土遺物実測図（弥生時代4）



図版5 出土遺物実測図（奈良・平安時代）



調査区垂直写真 (S=1/600)



調査区近景 (南西から)

第3 トレンチ10T～U区遺構群



写真図版 1 遺構写真

作業風景



作業風景



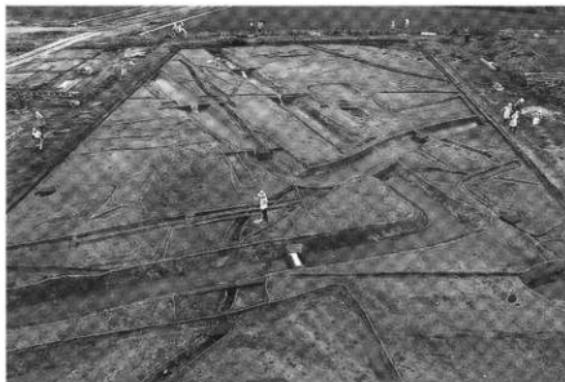
作業風景



写真図版 2



SD610



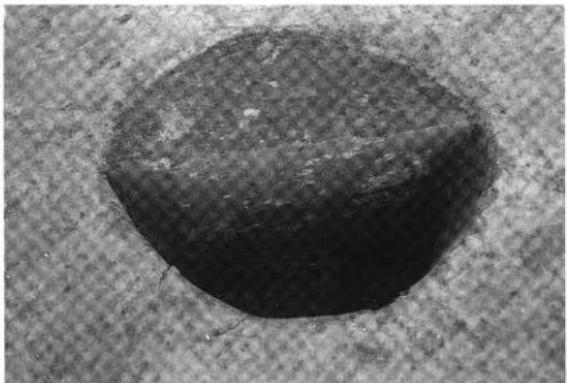
SD405・450



方形区画造構

写真図版 3

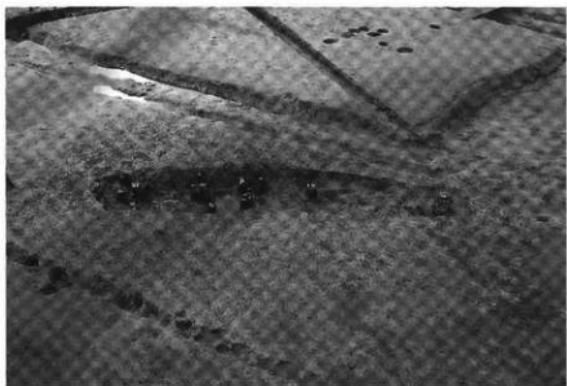
SP607

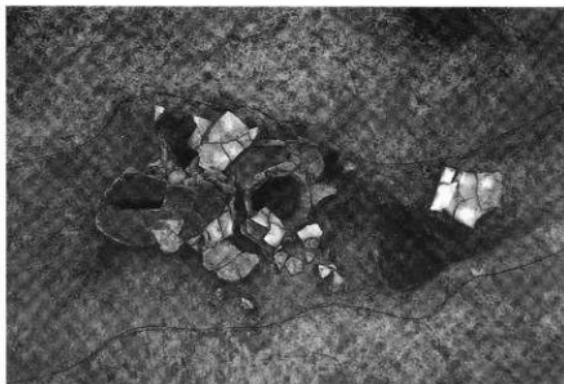


SD1001層序



SD631





SD583遺物出土状況

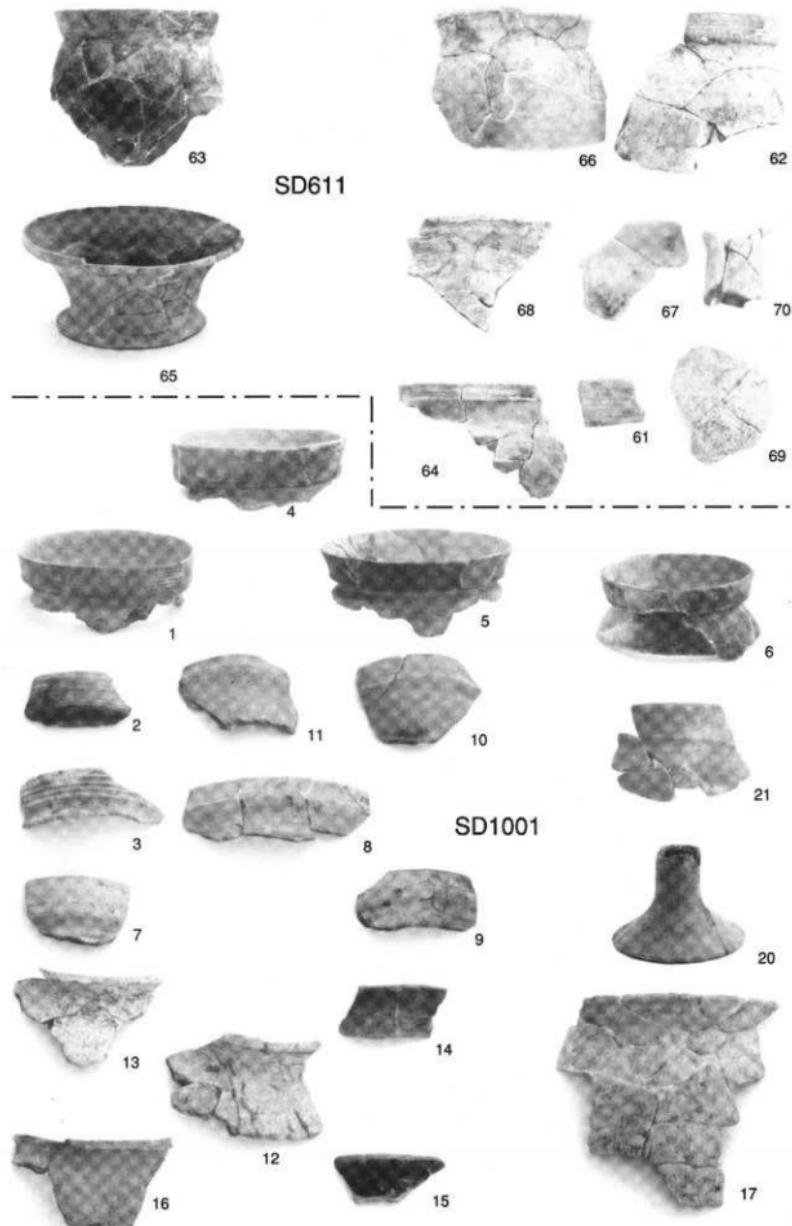


SX585遺物出土状況

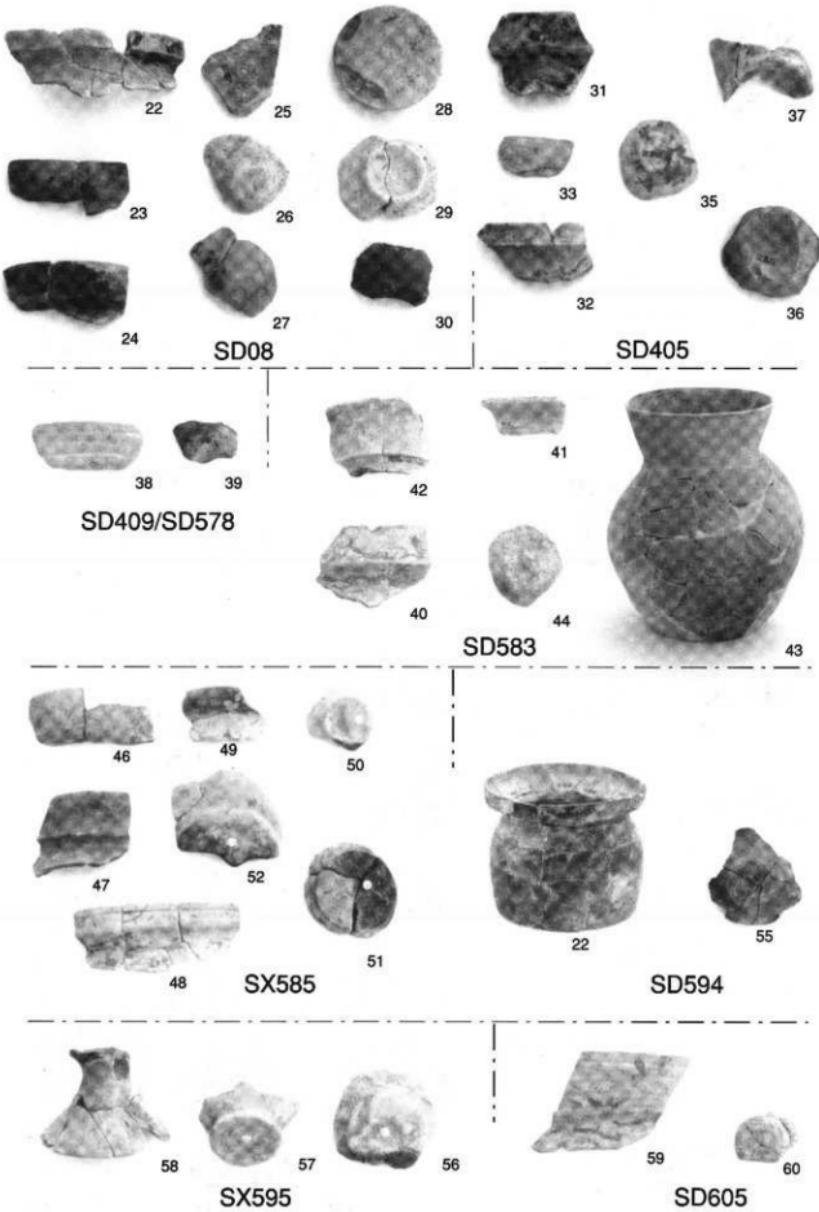


SK625遺物出土状況

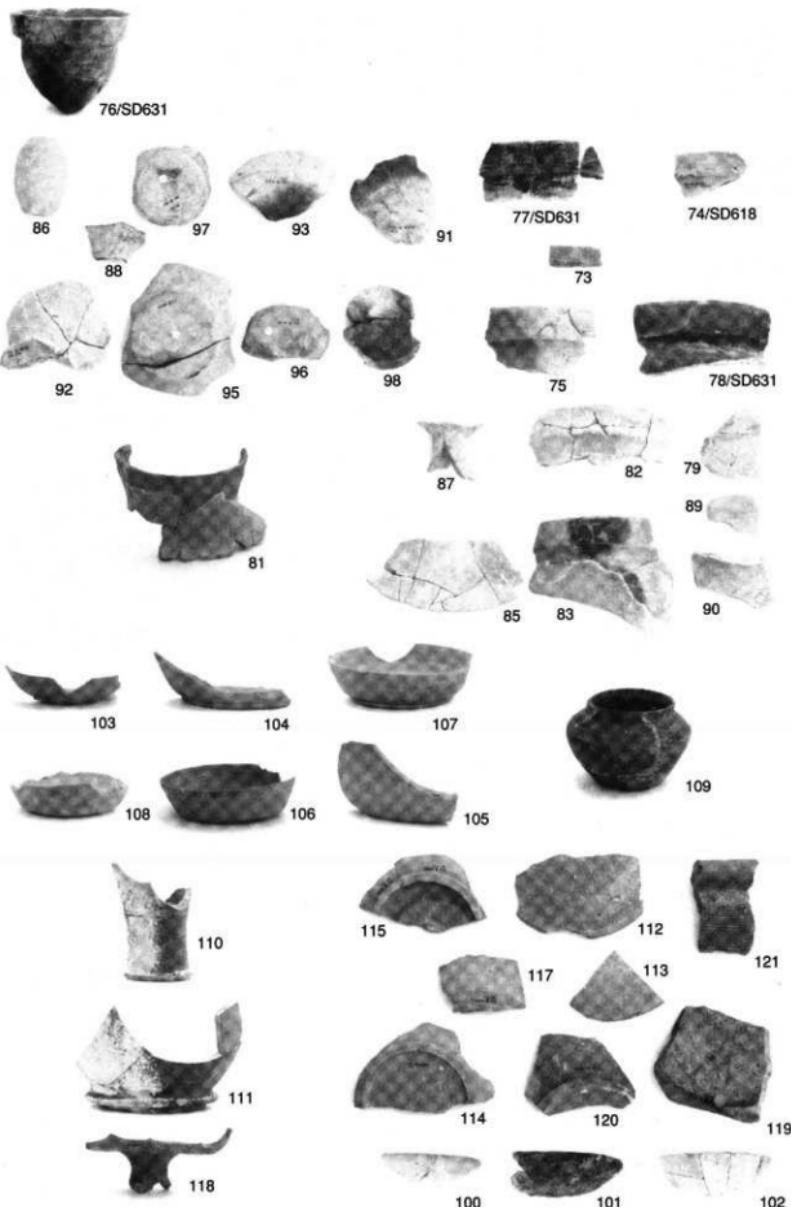
写真図版 5



写真図版 6 出土遺物写真（1）



写真図版 7 出土遺物写真（2）



写真図版 8 出土遺物写真（3）

報告書抄録

ふりがな	とやまさんだいもんまち ふたくもあぶらぬいせきたいあんじえーもくはつくつちょうさがいほう ふたくちともくかくせいじぎょうにかかるもようき					
書名	富山県大門町 二口油免遺跡第Ⅲ次A地区発掘調査概報 一二口土地区画整理事業に係る調査一					
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	20					
編集者名	尾野寺克実・中井英策					
編集機関	大門町教育委員会					
所在地	〒939-0294 富山県射水郡大門町二口1081 TEL0766-52-6964					
発行年月日	1999年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村名 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査原因
ふたくもあぶらぬい 二口油免	だいもんまちふたくち 大門町二口	163821 382048	36° 43' 21"	137° 03' 29"	19980601 ～ 19981218	大門町二口土 地区画整理事 業に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
二口油免	集落	弥生・奈良・平安	溝・上坑・穴	弥生土器・須恵器・ 土師質土器		

大門町埋蔵文化財調査報告 第20集

二口油免遺跡第Ⅲ次A地区発掘調査概報

一二口土地区画整理事業に係る調査

発行日 平成11年3月

発行 大門町教育委員会

編集 大門町教育委員会

印刷 協立業社高岡

